

お神楽ご奉納願書

令和7年3月1日

熱田神宮宮庁御中

島根県無形民俗文化財海潮山王寺神楽
渉外 石橋久美

拝啓 時下ますますご清栄のことお喜び申し上げます

さて、貴宮において、弊社による神楽のご奉納をさせて頂きたい旨、下記の通りご要望致します。 つきましては、ご配慮いただけますよう、よろしくお願いいたします。

敬具

記

- 希望日時： 令和7年6月21日（赤口）午前10時より約2時間半
- 希望演目： ①陰陽（七座） ②岩戸 ③簸の川大蛇退治 ④日本武
- 理由：
 - ①御社のご祭神である**天照大神**、**素盞鳴尊**、**日本武尊**が主人公である神楽をご奉納する事により、神々に楽しんで頂くと共に、人々にもお恵みを分かちたい
 - ②岩戸（喧嘩）➡大蛇（和解）➡日本武（統合）という象徴的な流れの演目を**夏至の日**（年間で一番昼が長い日＝天照大神のお力が最強の日）に奉納する事で、今後の日本国の安寧を祈願したい
 - ③神楽の持つパワーによって地球の穢れを浄化したい
 - ④神楽養成塾主体の神楽奉納の場を設ける事で、神楽後継者の育成を図りたい
 - ⑤日本の伝統文化の継承に寄与したい
- その他： 前回貴宮へのご奉納
昭和15年（1940年）11月11日（紀元2600年を記念して）

以上

もくじ

1. 山王寺神楽について

- ① 島根県無形民俗文化財海潮山王寺和野神楽
- ② 出雲大社教神代神楽本部
- ③ 神様指数とエンタメ指数

2. 神楽士養成塾の取り組み

- ① 現状の問題点
- ② 神楽士養成塾誕生！
- ③ 全国から集まった塾生＆応援団
- ④ 養成塾の活動

3. 何故、熱田神宮か？ ご奉納の内容、日程とその意義

- ① 貴宮のご祭神と私（石橋）とのご縁
- ② 天照大神系と素盞鳴尊系 2柱の神様が一緒に祀られる神社
- ③ 演目の意味と夏至の日の意義

1. 山王寺神楽について

①島根県無形民俗文化財海潮山王寺和野神楽

弊社は、数ある雲南市の神楽団（全 16 団体）の中でも、およそ 400 年の歴史を持ち、県の指定を受けた神楽団であり、出雲大社の本部として 120 年間ずっとご奉納を続けている由緒正しき神楽団です。

120 年のご奉納については、昨年 9 月に式典が行われ、山陰中央新聞などの地方紙だけでなく、朝日新聞や毎日新聞などの全国紙にも記事として掲載されました。

代表者名：足立道德 島根県雲南市大東町山王寺 932 番地 電話：090-3371-6836

②出雲大社教神代神楽本部

弊社は、出雲大社の大社教神代神楽の本部であり、他の数社の支部をまとめるリーダー的存在でもあります。例大祭では主に山王寺和野社中が奉納しますが、各支部からも数名の団員が助けに入ります。

ドイツ公演など、大きな公演の時は、本部を中心に他の数社の支部が一体となって、協力しあいます。

③神様指数とエンタメ指数

日本には、色々な種類の神楽が存在します。神主神楽のように神聖な儀式の側面が強くなると、神様指数は高まりますが、スペクタクルな面が乏しく、エンタメ指数は下がります。一方、石見神楽や広島神楽などのように、絢爛豪華でスペクタクルな面が強くなると、観客は魅了されてエンタメ指数は高まりますが、神様指数は下がります。

しかし山王寺和野の神楽は、TPO に合わせて変幻自在に、そのどちらの側面の顔も表します。子供たちが見に来る時などには、大蛇など派手な演目を舞い、舞台から飛び出すなどして観客を魅了する一方で、例大祭の夜の部のように誰も参列者がいない中で舞う神楽は、とても神聖な側面を示します。このように両方の側面を「いい加減」に操るのが、山王寺和野の魅力と言えます。

2. 神楽養成塾の取り組み

①現状の問題点

どこの伝統文化も同じですが、山王寺社中も深刻な後継者不足の問題を抱えています。現在 10 名の団員中、75 才以上 4 名、70 才以上 3 名と、ベテラン主要団員 7 人がすでに

70才を超えており、頼みの60代1名は入団してまだ1年、40代2名は神楽歴はあるものの仕事が現役なので殆ど出演できず経験が増えていかない、という状態となっています。

雲南市の中には子供神楽を通して若い世代が増えている神楽団もあるのですが、それは比較的便利な地区での話。山王寺地区は過疎化と高齢化が深刻な山間部にあるので、若い世代が殆ど住んでいないため中学校も合併により閉鎖となるという状況であり、この地域限定で後継者を増やす事は実質上不可能となっています。

ドイツ公演など大規模な公演をする際は、山王寺和野社中がリーダー的存在として頭を取るのですが、もし山王寺和野社中がなくなってしまった場合、どこの社中もあそこが頭を取るのには納得がいかない、という話になってまとまりがつかず、こんとんとした状態になってしまう事でしょう。また、120年続いた歴史が消えて別の神楽団が引き継いだ場合、120年の歴史を取り戻すためには120年もかかってしまうのです。

こうした事から、この山王寺和野社中の火が消える事は、単なる地方の小さな町の神楽団だけの問題ではなく、日本の始まりを教え日本文化の礎となる根底部分を喪失する重大問題であり、日本国民全員にとって死守すべき問題であると、私は思っています。

もちろん雲南市も存続のために色々な取り組みは行っておられますが、行政が主体となった場合、山王寺和野社中だけをメインに、というわけにはいかず、全団体に平等にという事になる上、各団体のそれぞれの事情なども配慮していると、どうしても効果が薄まってしまい、煙は出るけど燃え盛る炎までは行かない、という事になってしまうのです。

②養成塾の誕生

従来は「島根県雲南市大東町山王寺和野に生まれ育った長男」という入団条件でしたが、「山王寺に生まれ育たなくとも山王寺の神楽を愛して継承する者なら入団できる」という条件に変更してもらう事で、島根県出身者ではない私（石橋）が初めて山王寺のメンバーとして入団する事が許されたのでした。

とは言え、神楽を見た事すらなく、島根の事も何も知らない人が誰でも彼でもメンバーになれる、というわけにはいかないと思ったので、私が親しい友人達に声をかけ、有志を募って結成したのが「**神楽土養成塾**」と「**神楽応援団**」なのです。

まずは養成塾に入塾し、そこで練習を積んで、ある程度の基準を満たした人が、晴れて山王寺の神楽団に入団できる、というルールにしました。「養成塾」という存在でワンクッション置く事によって、「大きく門戸は広げられるけど、山王寺に迷惑をかけたり振り回したりする事はない」という両方の利点をうまく調整する事ができました。これこそが正に両方の側面を「**いい加減**」に操る山王寺和野の神楽から学んだやり方です。

③全国から集まった塾生&応援団

●神楽士養成塾：神楽舞や奏楽を実際に習得したい人

奥村麻香（岐阜県）、大和喜子（石垣島）、白野リサ（宮崎）、松本ひとみ（群馬）
石橋研治（私の次男・東京）

●神楽応援団：神楽自体はやれないけれど、裏方として応援したい人

関ミサ（友人・マーケティング・富山）、梅田恵子（親友・応援・ベルギー）、
熊倉克元（私の叔父・古文の現代語訳・栃木）

色々な人達がそれぞれの特性を生かしながら協力体制で進めて行く。これぞ八百万の神々が神はかりにかけて、それぞれの特性を生かし、みんなで力を合わせて問題を解決していく日本神話と一致したシステムです。

④養成塾の活動

今年の2月より、毎週月曜日8時からズームによるオンライン神楽教室を開催しています。神楽の実演だけでなく、ビデオ視聴による教材を充実させたり、神楽についての座学の講義も行い、積極的な神楽士の養成を行っています。こうした後継者の育成の他、神楽団が元気なうちにできるだけ映像に残す、という作業も行っており、神楽のセリフに現代語訳のテロップを付けたり、英語訳を掲載する、などの活動も少しずつ行っています。

4. 何故、熱田神宮か？ ご奉納の内容、日程とその意義

①御社のご祭神と私（石橋）とのご縁

ベルギーに住んでいる私の親友が、昔から熱田神宮が大好きで、毎年日本に帰国すると必ず熱田神宮をお参りするのだそうで、今年も5月に日本に帰国予定なので、その際に私と一緒に熱田神宮を参拝したいと言われました。

それで私達はご祭神を調べたところ、**草薙神剣**と**天照大神**と**素盞鳴尊**と**日本武尊**である事が判明しました。普通、アマテラス系とスサノオ系は一緒に祀られないのに、ここは珍しいと思ったのですが、御神体が草薙神剣なので、剣にまつわる神々が祀られているのだという事に気が付きました。

②天照大神系と素盞鳴尊系 2柱の神様が一緒に祀られる神社

出雲大社を始め龍神系の神社との深いご縁を感じてきた私にとって、これまで太陽系の神社とのご縁があまりないと思っていました。

しかし、最近では「火と水がひとつになってカミになる」とか、「鳳凰と龍が一緒になると麒麟が来る」など、という言葉が頻繁に耳にするようになり、片方だけに偏るのではなく両方のバランスが大事、「統合」という事への意識が高まるようになって来たので、今年は初めて伊勢神宮にもお参りに行ってみたいと思っていました。

それが熱田神宮では、この一社で既に統合が行われている、という事を知り、私を感じていた事がここにあったのか、、、と愕然とした、というわけです。

③演目の意味と夏至の日の意義

まず場を清める七座の舞として「**陰陽**」を行いたいと思います。これは神楽士養成塾の塾生達が5月の出雲大社の例大祭の時に初披露しようと現在、練習に励んでいる演目です。また、陰陽は剣を用いる「**剣舞**」も含むため、**草薙神剣**と関連性が高いと思いました。

最初の演目は「**岩戸**」が良いと思います。岩戸には最後だけですが、**天照大神**も登場します。「岩戸」では、**素盞鳴尊**が暴れて、天照大神が怒って岩戸に隠れる、つまり双方の関係が「**喧嘩状態**」であった、という演目です。

次の「**簸の川大蛇退治**」では、**素盞鳴尊**が登場し、大蛇を倒して最後に**草薙神剣**も登場します。ここで**素盞鳴尊**が天照大神にこの神剣を捧げた事で「**和解**」を意味すると思います。

最後に「**日本武尊**」では、日本武尊が登場し、征夷討伐に行く前に叔母である日本姫のところに立ち寄り、**草薙神剣**を授かって、蝦夷を退治する、という演目であり、これは神剣によって得る事ができた産物であり「**統合**」を意味すると私なりに解釈しました。

岩戸（喧嘩）➡大蛇（和解）➡日本武（統合）

という象徴的な流れの演目を**夏至の日**（年間で一番昼が長い日＝天照大神のお力が最強の日）にご奉納する事で、神々もとてもお喜びになられると思うのです。

令和7年7月5日、都市伝説界限では、南海トラフ巨大地震や富士山の噴火、隕石の墜落など、色々な天変地異の可能性がささやかれています。神楽には地球を浄化するパワーがあり、この日を迎える前に、この地で神楽をご奉納する事には大きな意味があるものと私は確信しております。

以上の理由により、是非御宮にて神楽をご奉納させて頂きたく、お願い致します。

ここから先は特に必要なわけではありませんが、島根と関係なかった私（石橋）がどうしてこれほどまでに神楽にのめり込んでいったのか？ 素朴な疑問を持たれる方も多いかと思うので、自分の記憶を振り返る意味にもなると思い、私と神楽の不思議なご縁についてご説明させていただきます。

付録・私（石橋）と神楽団

①渉外・石橋久美・自己紹介

東京で生まれ、横浜で育ち、埼玉にも少しいて、その後、イギリス、フランス、ドイツと合計 24 年程、海外で暮らし、10 年ほど前から富山に住んでいますが、両親の出身が栃木なので、本籍地は栃木、そして島根で神楽の活動もしています。

夫はイギリス人、子供は 3 人（男男女）、長男嫁はフランス人、なので孫は仏英日人。夫と長男と末娘はフランス、次男は東京、私は富山と島根、母は栃木に住んでいます。

国家資格コレクターで、宅地建物取引士、介護福祉士、富山県通訳案内士の国家資格を持っており、介護施設、見守りアパート、シェアハウスなどの運営にも関わっている他、英語教師免許もあるので英会話教室、翻訳、通訳ガイドなどの語学系の仕事、そしてパワーストーンヒーリングやチャネリングなどスピリチャル系の活動も行ったり、イネイト活性療法という画期的な治療法により痛みや病気を治す仕事もしています。

②初めての神楽との出会い（平成 17 年・ミュンヘン）

私がフランクフルトのエミレーツ航空でセールスエグゼクティブだった頃、文化交流からという理由で上司にかけあい、大蛇や衣装など 100kg の神楽団の荷物を無料にしてもらった事から、神楽団にとっても感謝されました。

ミュンヘンの日本祭の前夜祭の時、私は生まれて初めて神楽を見ました。私の隣に座ったドイツ人が「あなた日本人でしょ？ これ説明してくれる？」と私に話しかけて来たのです。しかしそこはドイツだったので解説はドイツ語、お面から聞こえる声は出雲弁でなまっていて言っている事がよく聞き取れませんでした。なので「ごめんなさい。私も神楽を見るのは今日が初めてだからよくわからないわ。」と答えなければならなかった私。

英語を勉強し、ピアノを習い、イギリス人と結婚し、海外で華々しいキャリアを積んだイケイケの私が、海外で直面したのは、「私は日本の事を何もしらない」という事実でした。それは私にとって頭を殴られたような大ショックだったのです。

つまり私は、戦後の GHQ の作戦通り、「西洋はカッコいい、日本はダサい」と思われて育った世代の典型のような人間だったのです。

その夜、神楽団の方々とお夕食をご一緒したのですが、その時、目の前の席に座っていたのが、当時の団長だった恩田さんでした。恩田さんは私が荷物を無料にした事を大変感謝し、「石橋さん、明日、稲田姫の役をなさいませんか？」と言ったのです。

後からそれは恩田さんの社交辞令だったと知ったのですが、当時の私は「え？そんな事していいんですか？」と興奮状態に陥って、やる気満々になってしまいました。その夜は同じホテルに宿泊していた恩田さん達のお部屋に乗り込んで「明日の稲田姫の役のリハーサルをして下さい！」と懇願しました。こうして私は、初めて神楽を見た次の日に、稲田姫として神楽の舞台に立っていたのです。

日本祭は屋外での公演だったので、お天気が心配されたのですが、神楽の舞が終わるまでは晴れてくれ、片づけを終えて私達がホテルに戻った途端、ザアザアと激しい土砂降りの雨が降りました。その後、ミュンヘン領事館の晩餐会の支度を整えてホテルを出発した途端にまた晴れて、空には大きな虹がくっきりと現れたのです。この時、私は「これは私に神楽をやりなさい、という神様からのサインなのだ」と確信したのです。

③初めての出雲大社例大祭体験（平成 18 年）

神楽の事をもっと知りたいと思い、当時ドイツに住んでいたのですが、わざわざ日本に一時帰国して出雲大社の例大祭に 3 日 3 晩ご奉納に参加しました。

その時、せっかく私がドイツから来ているのだから、という事で、例大祭の式典にも出席させて頂き、その後、神様と同じ高さでお祈りできるという拝み台みたいなところにも登らせて頂いて拝礼させて頂いた後、60 年間奉納をし続けて来た古参のメンバーですら入った事もない出雲大社の内庭に通されて、各お宮にもご案内されて、拝礼が許されました。宮司様からも直接ご挨拶を頂き、特別に出雲大社の本もプレゼントされました。初めて来た出雲大社でしたが、特別待遇を受けて、最高に感激しました。

誰も観客がいない真っ暗な中で、夜の舞台で陰陽の舞を見ていたら、神楽団が剣を振る度に東西南北それぞれの方角に向けて細かい金粉のような光が波打って、それぞれの方角に広がって行くのが見えた（わけではなく、感じた）のでした。

こうして神楽というのは単なる舞ではなく、実際に神様が降りてこられていて、ここから世界に向けてお恵みを撒いて広げていくものなのだ、という事に気が付いて、神楽の素晴らしさを体感しました。

④ケルン日本文化会館における大原神主神楽との出会い（平成 19 年）

ドイツのケルンに住むお友達がケルンに神楽団が来るからうちに来れば？と誘ってくれたので、日本人会の前夜祭で大原神主神楽と出会いました。その時「俺は人間国宝だ」と

言っていた長老さんに「明日の公演に、あなたは手拍子（チャンガラ）で出演しなさい」と言われ、大原神主神楽でも、**出会った次の日に舞台に出て**しまいました。

この時、**須賀神社の勝部宮司**の素晴らしい舞と、人間国宝の長老さんの素晴らしい大太鼓に魅了されたせいか、私は舞台の上で手拍子を奏でながら、何故か「ああ、やっと懐かしい皆に会えた。懐かしい、懐かしい」という思いで胸が熱くていっぱいになり、思わずボロボロと泣いていました。私は昔ここにいて、そこに集まった神々とは、かつての昔、仲良しだったんだよな、という思い出をその時ハッキリと感じたのでした。

余談ですが、去年、須賀神社の例大祭の際に、勝部宮司に20年ぶりにお会いしたら、私の事を覚えていて下さって、当時、長老さんに「神主神楽に出ちゃったからには、**あなたは神主になりなさい**」と言われた事を覚えておられて、「その後、神主にはならなかったのですか？」と言われました。

その日の例大祭で、飛び入り参加で私もお玉串を、という事になり、神社の中に入れて頂いて勝部宮司の祝詞を聞いていたら、20年前のあの時と同様に懐かしい気持ちが溢れて来て、またボロボロと涙が溢れて来ました。どうやら勝部宮司の声には神霊界に直接つながるポータルのような効果があるのだとわかりました。

⑤2度のドイツ公演（平成18年、19年）

神楽に情熱を燃やした私は、その後、2回ほど、神楽団をドイツに招いて、デュッセルドルフ、ジークブルグなど、あちこちでの公演を実現しました。3回目の公演の際は、パリで偶然出会って仲良くなった**安来市の島田市長**が率いるどじょうすくいとコラボして、デュッセルドルフやゾーリンゲン、ジークブルグなどで公演を行い、領事館での晩餐会にも招待されたり、市長から歓迎を受けたり、華々しい活動を展開しました。

しかし、私は多額の費用をかけて、大変な努力をしても、「ドイツ公演」は「後継者を増やす」という事とは直接的につながらない、**後継者を増やしたいなら、後継者を増やすための直接的な事をしなければ意味がない**、という事に気が付いたのです。その後、私も仕事が忙しくなってしまった事も重なり、いつしか神楽団とは疎遠になってしまいました。

⑥2度目の出雲大社例大祭体験（令和6年）

縁があって10年程前から富山で住むようになったので、せっかく日本にいるのだから、今年こそ行こう行こうと思っても仕事が忙しくて、なかなか例大祭に行く事ができませんでした。そのうちコロナが始まってしまったので、しばらくの間は、例大祭自体も行われなくなっていました。どこかで気にはなっていたものの、目の前の日々の仕事が忙しく、いつしか私も神楽の事は忘れてしまっていたのでした。

去年（令和6年）長男がフランスから来ていたので、日本を旅行する目的で、例大祭に合わせて久しぶりに島根に行く事にしました。約20年ぶりの出雲大社でした。その時、何人かのメンバーが既に亡くなっていて、新しいメンバーが増えていない、という事実を知って愕然としました。20年前に既にご高齢だった方はともかく、まだお若いのに病気で亡くなった方がおられたのは相当なショックでした。

メンバー10人のうち、70代が7人。60代の方は去年入団したばかり、40代の2人は仕事が忙しくて、殆ど神楽に出てこない。このまま放置したら、この神楽団は確実に消える。この神楽団を消滅させたくなかったら、**今、私が本気で動くしか、それを防ぐ方法はない。**この時、私はそうハッキリと理解したのでした。

小田さんに「来年は私、日本姫の役をやりたいから教えて下さい」とお願いしたところ、「**島根に引っ越して来たら、教えてやるよ**」と言われました。「わかりました」という事で、島根に小さなアパートの一室を借りて、雲南市大東町の住所をゲットし、「**大東町山王寺に生まれ育った長男**」ではない**初メンバー**として入団する事になったのでした。

⑦神楽士養成塾発足

それから私は親しいお友達に声をかけて**神楽士養成塾**を結成し、陰陽の舞を4人で舞うメンバーを全国から集め、オンラインで神楽を習得する、という画期的な新手法を用いて、現在、奮闘している、という経緯です。

「オンラインなんかで練習して、本当に神楽ができるようになるのか？」という疑問は誰もが思うところです。実際、誰もやった事がない画期的な試みなので、私自身「絶対に大丈夫」と言い切れるわけではありません。

「一対一で師匠に教えてもらう」という方法は山王寺に住んでご近所同士であれば理想的な教授法だと思います。しかし全国に散らばっているメンバーがそう何度も何度も島根に気軽に集まれるはずもなく、旅費だけでも大変だし、宿泊先の確保や仕事を休むなど、相当な負担がかかる中で、それでもできる方法を模索した結果がこれでした。

まだまだ未熟な私ですが、色々な取り組みを通して感じるのことは、神楽というのは、本人の生まれ持った才能とか技術とかというよりは、むしろ「この神楽ができるようになりたい」という**本人の思い**と、そのために全力で努力する**本人の姿勢**が大切なのだと思います。自分でできる努力は精一杯やった上で、我を捨てて**無になって「神様の道具として使って頂くこと」**への喜びと感謝があれば、あとは神様がうまいこと進めて下さる。そういう考え方がすんなりと理解できる精鋭メンバーを全国から集めました。これからみんなで力を合わせ、神楽を通して神様の思いを広げていきたいと思っています。